

178 胸腺上皮性腫瘍における新規治療ターゲットの同定	上妻 由佳
-----------------------------	-------

【目的】 胸腺腫および胸腺癌を含む胸腺上皮性腫瘍は縦隔腫瘍の 20%を占める最も頻度が高い疾患であるが、発症頻度が 10 万人につき 0.44~0.68 人と稀な疾患である。胸腺上皮性腫瘍は多くが無症状であり、5 年無再発生存率は正岡 I 期、II 期では 90%を超えるものの、III 期では 67%、IVa 期で 38%、IVb 期で 48%と進行期の予後は不良である。胸腺上皮性腫瘍に対して根治が望める唯一の方法は手術であるが、再発・切除不能な胸腺上皮性腫瘍に対する治療の選択肢は限られている。本研究では、次世代プロテオミクス「iMPAQT : *in vitro* proteome-assisted MRM for protein absolute quantification」法を用いて胸腺上皮性腫瘍における新規治療ターゲットの同定を目的とした。

【方法】 ヒト胸腺上皮性腫瘍組織(胸腺腫 type A、AB、B1、B2 各 3 例、type B3 4 例、胸腺癌 4 例)を用いて、iMPAQT 法により 342 種の代謝酵素を網羅的に定量解析した。

【結果】 組織型毎に各グループの代謝酵素発現量の違いが明瞭であり、特に胸腺癌及び TypeA グループでは全体的に発現量が低く TypeB3 で発現量が高い傾向にあった。One-way ANOVA では 68 種の代謝酵素が $p < 0.05$ を示しており、エンリッチメント解析の結果、多くはプリン代謝等の核酸合成寄与する因子であった。胸腺癌のグループでは多くの代謝酵素は他のグループよりも発現量が低かったが、核酸合成に関与する一部の代謝酵素に関しては胸腺癌グループで顕著に増加していた。

胸腺上皮性腫瘍の組織型による酵素発現の違い

